

『刻むのは技術、印すのは責任』

安全で豊かな未来社会に向け、刻印技術の進化を追求 浦谷商事 株式会社

昨今、マーキングの機能は、従来の偽造防止や品質の保証に加え、生産者の製造責任追求を可能にするなど社会における役割を拡げています。今回は、その「刻印」技術により製造現場におけるトレーサビリティや品質保証を支えてこられた浦谷商事株式会社を訪問しました。同社代表取締役社長の浦谷英樹氏に、創業からの事業変遷や製品開発に関する取り組み、今後に向けた展望についてお話を伺いました。

一 工具販売業からメーカーに転身 「刻印」の製造を始める

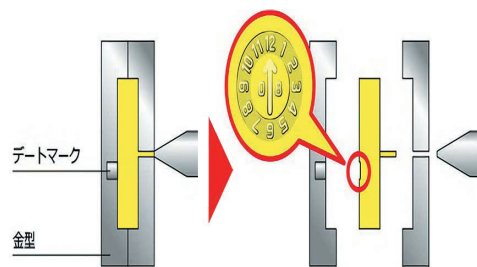
創業者である私の父は大阪西区で機械工具販売を生業としておりました。

約40年前、私が大学3年の時に商社からメーカーに転身し刻印や金属彫刻を始めました。私も当初アルバイトとして一緒に仕事をしておりました。

当初、製造していたのが刻印です。鉄道レールに打つ大きなものから電子部品に使用する1ミリ以下のものまで精密な製品を得意としていました。

そうしたなか我々が着目したのが「デットマーク」と呼ぶプラスチック金型部品でした。製造年月日やロット番号を成形と同時に製品にマーキングする製品です。射出成型と同時にマーキングされるため低コストでマーキングできるのが特徴です。当時は成形メーカーが社内規格のものを製作しており、標準品がありませんでした。そこに着目して製品開発をスタートさせました。

ではありましたが裏を返せば製品の認知度もないため、顧客にその必要性を知ってもらうことからのスタートでした。発売当初約40年前はトレーサビリティという言葉も一般的ではなく国内ではなかなか売上が上がりませんでした。そうしたなか先に売り上げが伸び始めたのは海外でした。金型材を取扱う海外のメーカー様の紹介でアメリカとヨーロッパに販売代理店ができ売り上げも順調に伸び始めました。日本でもトレーサビリティの重要性が認識され始めた頃でした。



デットマークの仕組み（上）と
同社が取り扱うデットマーク（下）

一 ブルーオーシャン市場における

認知度

デットマークは生産財（部品）ではなくあくまで付属品、付加価値の部分になります。

当時は標準品が存在していませんでしたので、ブルーオーシャンな市場



浦谷商事 株式会社

代表取締役社長：浦谷 英樹氏
本社：大阪市西淀川区姫里 3-10-22
創業：1966年（昭和41年）
従業員数：20名
事業内容：機械工具、器具、印鑑、
型抜き刃の製造・販売
URL：<http://www.uratani.co.jp/>



本社外観

瞳孔測定器「ヒトミル」

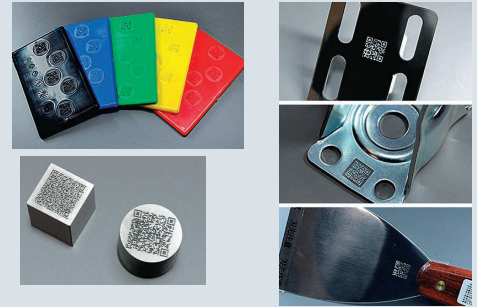


瞳孔計測は、ペンライトの光を目に当てた時の瞳孔の変化を確認し、定規を使って直径を測るというアナログな方法が今も使われている。

人の目で確認するため判断ミスが生じるのはどうしても避けられない。「ヒトミル」はこの作業を自動化し、

左右の瞳孔の表面積の変化、直径をデータで記録できるようにした装置。6年がかりで製品化にこぎつけ、さらに4年の歳月をかけて販売にこぎつけた。現在は製品を扱ってくれる大手医療機器代理店の協力を得ながら本格的な販売が始まっている。

QRマーク金型部品

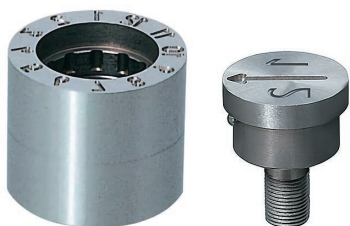


刻印時に QR コードがマーキングされるため低コストかつ短時間でマーキング可能。直接マーキングしているため半永久的に読み取りができる。当社が40年以上かけて培った刻印の製造技術を QR コード用金型部品へ応用した製品となっている。

— 従来の製品にあった課題を克服

売上を伸ばす

デットマークといっても、さまざまな型の製品があります。一番普及しているのが、当初から製造している OP 型と呼ばれる製品です。シンプルな構造をしており、金型に装着するため、成型時に抜けたりする心配がありません。しかし、例えば2022年から2023年に年号が変わった場合、金型を分解しないと製品を交換できないという難点があります。そこで、金型に装着した状態で交換可能な UL 型を開発しました。金型を分解する必要がなくなるので、大幅な経費・時間の節約に繋がります。この製品から国内でのデットマークの売れ行きが伸び始めました。現在では、自動車や電化製品、一般消費財のメーカーに当社の製品をご利用いただいているほか、金型の大手商社様のカタログにも掲載いただいております。認知度が広がっていると実感しています。



専用のドライバーを使って中心部を簡単に取り外すことができる (UL型)

— 新たな事業として

医療機器分野へ挑戦

現在は新規事業として医療機器の製造開発にも力を入れています。医療ドラマなどで見たことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、医療の現場では、患者の健康状態を把握するため、ペンライトと専用の定規をつかって瞳孔（黒目の部分）を測る機会があります。しかし、ベテランの医師が測るのと、新人の看護師さんが測るのでは、個人のスキルに差がでてしまい、結果に微妙なばらつきが生じてしまいます。そこで、客観的かつ確実に瞳孔反応を測定する装置として、東京大学の医学部と共同開発したのが瞳孔測定器「ヒトミル」という製品です。機械なので瞳孔の大きさを客観的に計測することができるほか、結果（エビデンス）を正確に記録して残すことも可能です。

現在の研究では、認知症（アルツハイマー病）やストレスの状況、目の病気の傾向など、瞳孔の反応からさまざまな情報が分かるということが明らかになっており、多くの大学で研究が進んでいます。本製品が今後、研究や医療の現場から注目される日も近いのではないかと考えています。



瞳孔測定器「ヒトミル」

— 既存事業と新規事業の

平準化を目指す

現在、既存のデットマーク事業が売上の6割強を占めており、まだまだ事業に偏りがあります。そうした背景もあり、現在は未来に向けた種まきとして、ヒトミルのほか、長年培った刻印技術を活用した QR コードマーキングなど、新製品の開発に取り組んでいます。将来的には、こうした製品が新たな事業の柱となり、ひとつの事業に頼らない売上構成になればいいなと思っています。

もちろん、製造業ですので、現場の改善にも精力的に取り組んでいます。現在は、製造現場の「自動化」を目指して効率的かつ快適な作業現場づくりを目指しています。これからも製造業としての誇りを持って、事業運営を行っていきたいと思っています。

— 貴重なお話をいただき、ありがとうございました。